

### (3)てんさいの飛来性鱗翅目害虫

令和7年6月下旬、長沼町に設置した予察灯にシロオビノメイガの誘殺が確認され、7月上旬には、道央地域及び道南地域のてんさいほ場で本種による食害が確認された。本種はてんさいの葉裏の葉脈沿いに数粒を並べて、80~100粒の卵を産み付ける。ふ化直後の幼虫は表皮を残して葉肉を網目状に食害し、生育が進むと葉柄や中肋を残して食害し、不規則な穴をあける。糸を張って葉を折り曲げ、その中に潜む。幼虫は「尺とり」状に歩行し、刺激に反応すると脚を縮めて敏速に後退して葉から落下する。老熟した後、地中にまゆを作って蛹化する。

また、8月上中旬には長沼町に設置したシロイチモジヨトウのフェロモントラップに多数の雄成虫が誘殺され、その後道東地域のてんさいほ場では幼虫による加害が確認された。本種の成虫は、体長約15mmで灰褐色、前翅には白色~黄褐色の斑紋を持つが、不鮮明なことも多い。卵は数十個が一塊となって葉に産み付けられ、灰褐色をした成虫の鱗毛で覆われる。幼虫の体色は淡緑色から黒紺色まで多様であるが、中齢以降は腹部側面に明瞭な白い線があることが特徴となる。老齢幼虫は体長30mm程度で、同じヤガ科のヨトウガ老齢幼虫よりも小さく見える。

両種とも、休眠性を持たず道内での露地越冬は困難とされていることから、令和7年度の発生は道外からの飛来によるものと考えられる。令和8年度の防除にあたっては、北海道病害虫防除所のホームページで飛来情報を確認するとともに、発生を認めた場合には速やかに殺虫剤を散布する。それぞれの種で効果の高い薬剤が異なることから、薬剤選択に留意し、防除実施後は効果を確認することが重要である。



写真 シロオビノメイガ(左:幼虫、右:成虫)(道総研 原図)



写真 シロイチモジヨトウ(左:卵塊、中:幼虫、右:成虫)(道総研 原図)